

レーニン主義「外部注入論」——

つれづれ…
親不孝者 

日本社会の苦しみに、

嬉々とする「前衛」

<http://ww3.tiki.ne.jp/~jcn-o/morinaga-hiso-oyahukoumono-blog.htm>

森永ヒ素ミルク中毒事件 資料館

<http://ww3.tiki.ne.jp/~jcn-o/hiso.htm>

昨年末あたりから、「二大政党制が破綻！」と、公然と大喜びする某（自称）「前衛」勢力。「大躍進」とネーミングまでしているらしい。数々の公害反対運動などの住民運動で、加害企業側からの斬りつけ役を見事に果たし、一部の悪徳な大企業からも歓迎されている「大企業への毅然とした態度」を売りにする党派。

日本社会が現・政治状況を産みの苦しみとして、熟考・思案しているなか、“ついにマルクスが復権した、いまがチャンス”という神経。

百年前に登場し、全世界で大失敗して、ナチス並みの粛清の嵐を無辜の人々に体験させたイデオロギーを吹聴するこの勢力は、古典的貧困ビジネスへと変貌しきった傘下組織にカツを入れ、専従者の食い扶持の確保に血眼になっている。人の不幸に乗じて、錆付いた独裁的内部統制のイデオロギーを利権の確保に応用し続けてきたが、「被害」が生まれるたびに、絶好のチャンスとばかり、市民・住民団体に浸透すべくうごめきを開始する。このイデオロギー勢力と早めに手を切らないと、市民は政治的に騙され続け、社会の改善は進まぬままとなる。

この党派、結論からいうと、社会的弱者を「支援」という名の旗を振りながら、最終的には自己の思想的影響下において奴隷にし、貧困ビジネスの餌食にしてきただけである。

彼らがもっとも嬉々とするのは、世界経済の問題点が深刻化したときであり、混乱と混乱の時期に、強固な「よりどころ」に頼ろうとする人間の思考停止状況と他者への依頼心が生まれてくるときである。

しかし、イデオロギーはさび付きすぎて、売り物にならない。したがって、過去の失敗をすべて「一言」でなかったことにしたいようだ。

そこで出てくるのが、いつもながらの、

“マルクスを国民に注入するには、「ソ連の覇権と長年闘ったと宣伝することが要」だ”という発想と手法である。

「ソ連・中国＝共産主義の核兵器は平和の核兵器だ」と長年主張してきて、平和運動をむちゃくちゃにしてきたのに、こんなことがよくも言えるものである。

だが、なぜ都合よくそう、そう思い込むことができるのか？ 現世の利益がぶら下がっているからだ。

“福島のがれが我々の勢力拡大の源”と色めき立っている。福島の被災者を、結局のところ飯の種にするつもりか？

大金が絡む被害補償の動きには敏感に触手を伸ばし、民主集中制傘下の組織が現世の利益を求めて被災者の窮状に「救済」と称して近づき、どこかの基金方式を売り込もうとしている向きもある。

ビジネス拡大のチャンスと色めき立つのは、さながら、貧困ビジネス・震災資本主義集団である。

おまけに、“自民党系傘下組織も取り込みが可能となり、我々にチャンスが巡ってきた”と、無節操なハッパがけ。“米国政権にいた経済学者もマルクスを評価したと言った”と活気づく。日頃は「米帝」でも褒められると、うれし涙か？

「大手メディアは翼賛報道」といいつつ、「しんぶん」も組織も、翼賛会化…。知らぬが仏の構成員。

「大企業の横暴な支配を批判できるのは我々だけ」、とよく言えるものである。

結局、最後は、カネ。美辞麗句の鎧をまとった、その分け前にはいかほどの旨みがあるのだろうか。

史上稀に見る親不孝ものが、日本では、不条理な苦しみにあえぐ人々の前では、いまだに大きな顔をして闊歩している。

組織を牛耳れば、社会からの監視を排除し、内部の料理をはじめめる。

人道にもとる行為を批判する人物への誹謗中傷を一定期間じっくり行い、外堀を固め、良識の主張を「みんな（※）に迷惑をかける」異論を言い張る者として、一齐に「路線問題」にスリかえ、組織内の人民裁判的査問、言論弾圧、構成員（みんな）への扇動、謀略的情報操作、スターリン的満場一致礼賛主義、誹謗中傷、監視、暴言、隠蔽、プロパガンダ、嘘、そして物理的追放…、と見境がなくなる。

（※ この勢力、「みんな」という文言が大好きだ。まことに、かわいらしい言葉だが、いったん使い方を間違えると

凶器にもなる。特に、「みんなでやったから正しいのだ」とのロジックに悪用した場合だ。外側には民主主義を千も万も語りながら、組織内では、民主主義を単なる多数決と強弁する、超・ご都合主義的短絡思考。これが下で紹介する「外部注入論」が導き出す「前衛」論の畏だ。

ソヴィエトでの数百万人以上にのぼる自国民への粛清も、見事に「みんな」＝全員でやった殺戮だ。カチンの森では、ポーランド将校をみんなまとめて殺害した。これもみんな決めてやったことだ。

カネに心を売った人間の浅ましさが美辞麗句を鎧にして全開する。彼らが外側に「敵」と宣伝する、その「敵」が使う半非合法の手段を内部には平然と適用するのである。

それでいて、その二面性を恥ない。

究極の言い訳は“敵の世界も同じようにしている”だ。

この合理化論法に、意外に構成員は黙ってしまう。なぜなら、たいてい、そこには利害関係や金がつきまとっているからだ。拜金主義をくすぐられると、現世の利益のためには手段を選ばず、となる。

「目的のためには手段は選ばず」というイデオロギーは「現世の利益のためには手段を選ばず」に簡単に転化する。だが所詮、その最終目的は「赤い貴族」の利権の確保だ。

「庶民の感情などは、プロパガンダでなんとでもコントロールできるぞ」と構成員に信じ込ませ、労働力として動かす、よく出来た思想である。

このような、マルクスやレーニンが開発し、旧ソヴィエトで全開・到達した殺戮の嵐の源は、単純にスターリン個人の性癖に帰するものではない。

それは、マルクス主義そのものに内在する思想的源流と、その思想の実行を旗印にするところから生まれる「民主集中制」という民主主義の根幹を捻じ曲げるプロレタリア独裁（執権と言い換えても同じ）、つまり権力の平行移動による社会の単純理想化論である。もっと本質を衝けば、とどのつまり「人間解釈の単純化」である。

彼らの基本思想、とくに組織論の中核をなす「外部注入論」をあえて、ご紹介しておく。最終的に、この思考方法に縛られたい方がどの程度おられるかは別として。皆さんの団体が浸透戦術の対象にされ、最終的にイニシアティブを奪取されて乗っ取られなくなければ、この思考方法の悪質さは一通りご存知のほうがいい。

レーニン「外部注入論」のロジック

【前提】

「資本主義から共産主義への移行は歴史的必然だ。

必然といっても、だれも検証していない、摩訶不思議な唯物史観の主張。最近では絶対に口に出さないが、潜在意識下では、ソヴィエトなどを想像して郷愁にふけている。

それを担うのは資本家にいじめられているはずの労働者階級だ。

マルクスの資本論や剰余価値学説は、これをまず定義するところから始まる。したがって労働者の方が、圧倒的に数が多いから、資本家を打倒する革命は、労働者階級が実行すべき“義務”となる。だから革命は労働者階級の“歴史的使命”だ。

…だがしかし、ここからが最も重要だ。ある意味で、【前提】よりもはるかに重要。いや現世では、【前提】

など、数千年先の事にしておいて、むしろ真面目に実現の努力などしなくて良いことにしておいた方が都合が良い。議員や傘下組織が増えることで、さまざまな利権にアクセスできれば十分だ。マルクス主義に続くレーニン主義で完成された、以下の論理構造だけ活用できれば、その管理が容易となる。資本主義を批判しながら、もっとも時代遅れの資本主義的内部統制が正当化できる。それだけで十分だ…。

まず、レーニンに言わせれば、労働者階級が自らの歴史的使命を自覚することは不可能なのだ。なぜなら、労働者は日々工場で奴隷のように働かされているから、物事を考える力は無いのだそうだ。

ゆえに、目先の事しか考えないのが労働者というものだ。

せいぜい考えられるのは目先の生活の改善（※）だ。

（※）「革命ではなく小手先のことしか考えていないのが普通の労働者」という侮蔑の意味が込められている。

ゆえに、労働者階級は“歴史的使命”に自分からは気付かない。

ゆえに、労働者階級の“歴史的使命”への自覚は労働者階級の内部から自然には生まれない。

ゆえに、革命への道筋は労働者階級以外の者から示されるのだ。

ゆえに、“労働者階級の無知な実態”と、“労働者階級の使命”の両方を知っているところの、頭の良い富裕階級の知識人が、革命の思想を、無知な労働者に“外部から注入”しなければならない。“外部から注入する”役割をもつ

もの、それが“前衛”というものである。」

実際には、なんだか、格好良さげな、ヒロイズムをくすぐり、鼓舞する言い回しになっている。だが、実際には、以下の現象を生み出す。これが世の中の悲しさだ。

「外部注入論」では、労働者階級（※）は、労働者階級が気がつかないところの「労働者階級の使命を教えてくれる前衛」の指導者の、「教え」と「決定」には無条件で従わなければならない。

※「労働者階級」は、しばしば、「国民」「人民」「大衆」「民衆」「人々」などと言い換えられる。

前衛組織を運営する裕福な職業的専従知識人には、当然、労働者階級は献金し、全面的に従わなければならないし、前衛に労働者が従わなければならない、労働者階級全体の利益を損ねる「人民にあるまじき存在」＝「人民の敵」となる。

したがって、たとえ、労働者が共産主義を願望しなくなったとしても、それは労働者が無知だからであり、誰一人共産主義を受け入れなくとも、専従共産主義活動家は、労働者に思想を注入し続ける運動をやめてはならない。資本主義が安定しているときは、労働者は怒らないが、資本主義が問題を起こし始めたら、それは外部注入の最大のチャンスだ。喜んで勢力拡大にまい進しなくてはならない。つまり、人類が存在する間じゅう、これは、やり続けなくてはならない事業なのだ。

この共産主義の手法や理論は、アドルフ・ヒトラーも、よく出来ていると感心しながら勉強したほどらしい。

なんとも傲慢で、鼻持ちならない人間の経典になり得る良く出来た、自己完結型の論理だ。

エリート思考（志向）の人間にはぴったりの論理構造である。ましてや、既成街道から外されて恨みに駆られた単なる野心家にとって、相手を「資本制」と定義して、別ルートで「見返したい」場合には、格好のご都合主義のルールであろう。

全体主義のお手本のような無限サイクル理論である。アーレントが全体主義を終結の無い無限の世界運動というように指摘しているのは、このような思考方法が、共産主義や排外主義など色々と衣をまとっても、全体主義の論理として共通していることを衝いた箴言である。

社会が停滞し、人間が過ちを犯すとき、それに不満を募らせる国民の、はげ口として、排外主義、軍国主義、マルクス主義などの全体主義イデオロギーは常に役割分担をしながら、社会に嬉々として登場し、社会は暴力的にすすんでいく。アーレントが「棒とにんじん」に形容したのは、易きに流れる手段として人類が再びこのような思想を選択することが無いようにとの警鐘であろう。

労働者が「前衛」なるものに従わなければならない、ましてや、「前衛」に集う構成員（労働者でなくても）が、「前衛」に異論を唱えれば、労働者階級みんなが迷惑をうける、という論理が出来上がる。つまり「あんたがぐちゃぐちゃ言うと、みんなが迷惑するんだよ」ってことである。誰も迷惑を感じていなくても、勝手に本人がそう思い込むのである。これがマインドコントロールである。

ゆえに、「前衛」に従わない異論を唱える個々の労働者は、仲間である労働者階級に迷惑をかける自分勝手な人間と判断される。そんな輩は、「残念なことだが」、自動的に「人民の敵」とみなされ、最終的には、侮辱の嵐

をうけて追放されても致し方ないことになる…。なんにも悪いことをしていないのに、「異論を唱えると」なんだかいきなり「人民の敵」になるのである。それでソヴィエトでは数百万人が殺された。どこの社会主義国家でも似た現象が起きた。

労働者階級というより、そもそも、一人の人間であるにも関わらず、に、マインドコントロールされた構成員は、このことに気付かず、「追放」されて、その後、何年もモヤモヤを引きずる「きまじめ人間」が多い。他の全体主義とともに人類の悲劇である。

ソヴィエトの影響下から脱出するどろどろの闘いの過程で、「人間の顔をした社会主義」-プラハの春-なるフレーズがはやったが、それは、ソヴィエト崩壊までの話である。某前衛が自分のことをそういうイメージで宣伝しているつもりなら、ポーランドやチェコの国民は「ちょっと、日本人、おかしいんじゃないの？」と内心思うだろう。マルクス・レーニン主義には、そもそも、「人間の顔がない」からだ。

この「外部注入論」には、知識人が無自覚の内に陥りやすい、現場労働者への差別・蔑視感情や、上から目線の思考方法が前提に横たわっている。というより外部注入論はそのような感情を一から作り出すことができ、その萌芽を成長させ続けることができるのである。(障害者問題も同様に上から目線で解釈され、彼らの政府が出来たときにはじめて幸せになれるという、陳腐な理論に組み込まれている。)

人間の深層にある、このエリート主義的侮蔑感情が「人民解放の理論」の基礎として閉鎖的に自己完結されてしまっている。だから、なんだか外側には、「救済」や「平和」や「民主主義」や「人権」「平和」を声高に主張するくせに、内部では、そして至る所で、市民の活動への介入や、時には人権侵害や、さまざまな問題解決の過程に割り込み、おおもめをやらかす。そして、傲慢な「自分たちだけ

が正しく、それに従わないものは、味方ではなく、異論を唱えれば、みな敵」というセクト主義に拍車がかかり、とまらなくなる。やってる本人たちもその理由に気付かない輩が多い。セルフマインドコントロールだ。

だが、実は、裏で彼らが「敵」というものと現世に利益で結びついて、住民運動のリーダーを背後から切りつけて、平然としている場合がおびただしく多い。

自らは「外部注入する貴重な側」だと思い込んでいるから何も矛盾を感じない。攻撃している相手の苦しみなどは、関係ない。攻撃対象の市民は「歴史的使命」を知らない、無知な住民だから、追い出してもかまわないという論理が回転する。これでも末端構成員は、自分は「敵」と闘っているんだ、これは、「路線」問題なんだ、と納得し、そのような所業を積み重ねるうちに、もう過去を振り返って反省したり、葛藤したりすることは無くなるし、出来なくなる。過ちを詭弁や屁理屈で正当化し、ますます、嘘の上塗りを続けることになる。

ちなみに、稀(まれ)に、それに気付いたら、自分から脱退しようとするが、なかなか「脱退」は許してくれない。規約違反での除名の形をとられることが多い。なぜなら、そうしておけば、なんだか、追い出された側が規則を破った悪者のような印象で、自分たちのほうが、なにやら迷惑をこうむった正当な側に演出できる(所詮自己満足だが)からである。この「前衛」、結構、体裁ばかり気にして生きている。

これは、特に、名の知れた知識人が異論を唱えはじめたときに特徴的である。このような場合は、「物理的追放」までに結構長い時間をかける。その間に、その人物の人脈をもぎ取り、1年から数年以上、対象者の行動を監視して、組織の方針と異なる言動をした時点で、査問的追及(これを国家的にやったのが人民裁判)を行い徹底的にいじめ、規約違反の「除名」にし、社会的名誉や尊厳まで貶

めることにためらいをもたない。構成員にはすべて「組織防衛」の一点で説明づける。現世の利益や、所詮コップの中をつまらないポジションであっても、餌が目の前にぶら下がると人間は弱いものだ。アーレントの言う「棒とにんじん」効果である。日本流には「飴と鞭」か。古代から使い古された手法だ。

苦楽をともにしてきた仲間から、このような仕打ちを受けるくらいなら、意味不明の「前衛」などあつという間に辞めればいい。ましてや、苦楽は、なんにも共にもしていない後から侵入してきた「前衛」とやらの連中からこんな仕打ちをうけるなら、普通の人間は愛想を尽かす前に、何とか建て直そうとも努力するものだ。組織に、「前衛」とやらが浸透し、全体主義がはびれば、外に別団体をつくるのは日本の民主主義が保障する当然の権利である。

だが、ともかくも、あとから来たものは大喜びである。正式に「除名」ができ、できあいの組織を手中にできるからである。まあ、「居抜き」というやつだ。

「前衛」などと自称する組織は何十年にもわたって、このような謀略と己への偽りを含めた歴史への冒涇を繰り返してきている。公害問題なら、これにもっと大喜びをするものが背後にもう一つ控えているだけである。

資本・共産同盟軍ほど強固な完全犯罪組織はない。その原点が旧ソヴィエトの歴史の深部に「ノーマンクラツウーラ」の「収容所群島」とそれを生み出した政治思想プロセスとして刻み込まれているのである。共産主義者は、平然と、管理者を装って、凶暴な資本主義を実行できる。それが外部注入論のロジックだ。共産党の一堂独裁で現に実行されている国家資本主義も同様の要素をもつ存在だ。

共産主義者と手を組んで、その「宣伝・扇動」という名のマインドコントロール技術を代行させながら陰湿に弱者を支配しようと試みる資本家には「クズ」という名の変わりに、将来に、軍国主義的排外主義を生み出す

前近代的資本家として、別の名前が与えられるようになるだろう。そのような企業が、そのような所業を続ける限り、市場から退場せざるを得ない方向へ導くことは、資本主義の退化を防止する上でも極めて重要だ。

ところで、時々、「マルクスはロシア革命とは別だ」として、レーニン主義と切り離して単体で評論家が論じることがある。だがそれは、資本主義の改善に対して、その評論家が何も具体的な改善行動をした経験がないことを良く示している。特に悪意はなくとも、過去のイデオロギーに依存したまま、社会の変化を傍観者の視点から「思想」を説きながら期待しているだけとも言える。そういう視座からマルクスをいまさら賛美しても、現実政治では、必ずレーニン主義となる。新しい思想があるとすれば、それは新しい社会で産みの苦しみを経て考え抜かれるものであろう。つい最近まで、ソヴィエトの原子力を賛美していたようなレベルでは、これからの科学・技術社会論や、政治哲学を語る水準にはないといえる。

「ソヴィエトは“人間性否定の社会主義”と決めましたから、私たちは違います。我が党が目指しているのは、“新しい社会主義”だ」??? そんなたわごとで騙されるほど、日本国民は愚かではない。と期待したいところだ。

欧州危機に端を発した世界経済の混乱は、資本主義の問題点も浮き彫りにしていることは間違いないが、主要な問題は、金融財政政策のあり方に起因する部分が多く、「資本制生産様式」を破壊することで解決されるような単純なものではない。だが、無能な政治家の一部は、軍国主義や排外主義に一時の逃避を求めがちである。その途端、社会は左右の全体主義と排外主義の草刈場とされ、閉鎖的外交政策へまっしぐらに進みだす。国民の怒りを排外主義へ扇動する負のサイクルが回り出すのである。

その問題点を解決していく方法論は、これ

から人類が真剣に考えなければならないテーマだ。まして、排外主義や共産主義イデオロギー（も排外主義となる）はそれに比して、「易きに流れる」下流のシロモノと化している。それは、彼らが美辞麗句を吐きながら、陰で行っている言論弾圧や利権あさり、反対政党と連携しての市民・住民運動への背後からの切りつけ行為、科学・技術への無節操な態度と、その自己修正能力の全くの無さで、自己証明されていることだ。

私たち市民の側も、新しい価値観と民主主義の方法を検討しなくてはならない時に、怒りに任せて、さび付いた過去の全体主義イデオロギーにはけ口を求めれば、凄惨な歴史の繰り返しが待っているだけであることを歴史から学ぶ必要がある。

とまれ、多少とも社会的政治的活動を経験した多くの方が指摘する彼らの強烈な「セクト主義」(*)がとまらないのは、政治環境把握能力の低さといったテクニカルな問題ではない。共産主義が提唱された時点で、これを社会発展史という無理やり法則化された後付理論の中に「一神教」として強引に位置づけてしまったという、その根幹部分に起因している。

※最近では、フロント組織で使い分け、あるときは薄めて勢力を拡大しその後、急に表面化するという「臨機応変」が多用されている。だが、やっぱり、中央からの大号令で、豹変することが多い。

ちなみに、ソフト路線を打ち出している「前衛組織」の内部では、この「外部注入」論は、言葉をかえて、学習活動や、歌声や、演劇文化活動や、子ども・障害者問題や、スポーツ信仰、はては宗教団体の有志の取り込み、などとなるらしい。まあ、彼らがそう主張すればするほど、カルト教団や他の全体主義勢力も、ますます彼らの手法を真似るだろう。洗脳も学習会も、「似たもの同士」の草刈場と化し、勢力争いと、モラルの崩壊で、

どンドン社会はすさんでいく。

レーニンの「国家と革命」にも盛り込まれているこの基本思想は、マルクス・エンゲルスの資本主義批判と「共産党宣言」を「なりわい」とする専従活動家が「主義」に転換し、それを「実行に移す」場合、必然的にこうなることを示している。閉じた社会を形成し、外部から隔絶させて利権をあさる方法としては非常に良くできている。これを「独裁」という。

「社会が怒りに満ちたときに、この自己完結型・単純化理論を“外部注入”し、マインドコントロール学習会を全員に徹底実施すれば、民衆は身も心も動乱・波乱を期待するようになるはずだ…」

マルクス・レーニン主義のカルト的思考である。

同時に、これが自己完結型・全体主義（マルクス・レーニン主義、軍国主義、<マイクロでは>カルト的マインドコントロール等々）の最大の特徴である。